

# Abunai ! and Vorsicht ! : A Comparison of Routine Formulas in Japanese and German

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/27736">http://hdl.handle.net/2297/27736</a>

# 「危ない！」と“Vorsicht!”\*

—— 表現形成における視点の違い ——

西 嶋 義 憲

## 1. はじめに

どの言語にも、ポライトネスやコミュニケーション上の通常性に関連付けて他人あるいは自分の行動をメタ言語的に評価する概念がある。たとえば、日本語なら「丁寧な」「やさしい」「生意気」などが、ドイツ語ならば“höflich”, “freundlich”, “überheblich”がそれにあたる (Marui *et al.*, 1996)。このような概念は、コミュニケーション行動評価概念 (evaluating concepts of communicative behavior) と呼ばれ、その対照研究は、それぞれの言語のコミュニケーションスタイルにおけるさまざまな特徴を明らかにしてくれる。コミュニケーション行動評価概念の最近の研究では、コミュニケーションにおける視点が評価概念を表現する言語項目に埋め込まれていることが指摘されている (Nishijima, 2006)。一般に、コミュニケーションにおいてどの視点を選択するかはそれぞれの言語の適切なコミュニケーションに関して重要である。他者とのコミュニケーションでは、それぞれの言語に適切なある特定の視点から発話を言語化する傾向があるからである。

では、適切なコミュニケーションに関わる視点はどのようにして獲得されるのだろうか。さしあたり仮説として、つぎのように考えることができよう。すなわち、社会化 (socialization) の過程において、われわれは頻繁にさまざまなコミュニケーション行動制御慣用表現を繰り返し聞かされるが、それらが視点の獲得に重要な役割を演じている可能性があるのではないだろうか。コミュニケーション行動制御慣用表現とは、特定の場面で相手の行動を制御す

るために使用される決まり文句のことである。たとえば、「危ない！」や“Vorsicht!”がその表現の例である。これらは、日本とドイツのほぼ同じ場面で発話される可能性の高い慣用表現である。本稿は、上記の仮説をいくつかの語彙データを用いて検証し、さらにいくつかの対応する場面で発せられる日本語とドイツ語の慣用表現を比較することによって、その慣用表現の言語化および使用法における差異を視点という観点から明らかにする。

## 2. 先行研究

ポライトネス研究には、さまざまな研究分野がある。そのうちの1つは、コミュニケーション行動評価概念の研究である。この研究には、2つの側面がある：1)日本語、ドイツ語といった個別言語ごとの評価概念の分析；2)日本語と英語、日本語と韓国語といった2つの言語間で対応する評価概念の対照。まず、第一の側面についてだが、これまでにいくつかの言語を対象に研究がなされている。ドイツ語ではHermanns(1993；1995)；Yamashita(1995)；Reinelt(1995)、日本語はNishijima(1995；1996)が挙げられる。第二の対照研究は、日本語とアメリカ英語についてはIde *et al.*(1992)、日本語とドイツ語についてはMarui *et al.*(1996)、Nishijima(2000, 2006)、Kuhlmann(2005)、日本語と韓国語についてはNam *et al.*(2006)、日本語と中国語については西嶋 & 陶(2010)がある。これらのさまざまな研究は、コミュニケーション上の視点が、特定の言語のコミュニケーションの通常性と関連していることを明らかにしている。たとえば、Nishijima(2006)は、コミュニケーション行動評価概念は会話参与者である聞き手への共感を前提に使用される傾向があると指摘している。共感とは、日本語の具体的な言語化に関連する視点を形成するものである(久野, 1973; 牧野, 1978)。

上記のような評価概念は、日常的に頻繁に使用される慣用的な表現の使用と関わっていると考えられる。そして、そのようなコミュニケーション行動制御慣用表現などの慣用表現の使用は、適切なコミュニケーションに関わる視点の獲得の際、何らかの役割を果たしていると思われる。この方向での実験的調査としてはNishijima(2006)がある。これは、日本とドイツの対応する

場面で発話される機能的に等価な慣用表現を比較している。それによると、日本語の慣用表現は聞き手への共感に基づいて形成されているが、ドイツ語の慣用表現は、話し手と聞き手との間の対立を基礎としていると主張している。この研究は、認知言語学の観点から行なわれた日本語の研究と関連している (Ikegami, 1991; 中村, 2004; 山梨, 2009)。たとえば、山梨(2009)によれば、日本語は状況の内側の視点から事態を記述する傾向があり、英語は状況の外側の視点からシーンを記述する傾向にあるという。認知言語学の分野におけるこのような知見に基づいて、つぎのように視点の問題を考えることができる。日本語の慣用表現の言語的生成においては、コミュニケーションが行なわれる場面の中に話者が埋め込まれ、その状況の中の視点から経験的に事態を観察している。他方、ドイツ語では、他者とのコミュニケーションにおいて状況の外側にある視点から客観的にシーンを眺め、そのシーンには話者も含めた会話参加者を観察する傾向にある。まとめると、つぎのような仮説として提示可能である：

言語間における視点選択の差異は、一般に、慣用表現の形成に反映されている。社会化の過程においてそのような慣用表現を日常的に頻繁に耳にすることにより、そのような視点が獲得され、強化される。

### 2.3. 材料と方法

上記の仮説はつぎの2つの方法で検証されることになる：

- (1) 日本語とドイツ語の機能的に等価な慣用表現を比較することによって：たとえば、「危ない！」と“Vorsicht!”、「聞こえませんか」と“Lauter bitte!”。
- (2) 日本とドイツの対応する場面において期待される機能的に等価な表現に基づいて (アンケート調査)

(2)のアンケート調査について少し説明しておこう。仮説を検証するために、2004年11月から2005年1月にかけて日本とドイツで実施した、慣用表現に関するアンケート調査のデータを使用する。調査の対象は、金沢とドイツの幼

稚園に通っている子供たちの保護者である。

上記仮説に基づいて、以下のような操作的な仮説を設定し、それを検証する：

日本人の保護者は子供たちの否定的な感情への共感によって言語化される表現を発する傾向がある。しかし、ドイツの保護者は、子供たちの否定的な感情を肯定的なものに変化させようと鼓舞するような発話を発する傾向にある。

なお、調査されたアンケートの問いは以下のようであった：

つぎのような場面を想定し、そこであなたなら何といいますか？

私のこどもは公園で転び、とたんに泣き出しました。しかし、傷はたいしたことはありません。

### 3. 結果と考察

#### 3.1. 対応する慣用表現

##### 3.1.1. 「危ない！」と“Vorsicht!”

日本で自分の子供を連れて散歩をしているとき、子供が余所見をして電柱にぶつかりそうになった場面を想像してみよう。おそらく、日本人の保護者はその際、「危ない！」と叫ぶのではないだろうか。ドイツ人の同僚によれば、ドイツで同じ状況ならば、場面にもよるが、一般的には“Vorsicht!”か“Halt!”と言うとのことである。ここで、両言語の表現は、機能的に等価だといえるが、文法カテゴリーおよび意味に関しては等価とはいえない。

たしかに「危ない！」と“Vorsicht!”は、日本とドイツの対応する場面でしばしば発話されるので、機能的には等価とみなすことができる。これらのコミュニケーションに関わる慣用表現を比較すると、いくつかの点で違いが認められる。意味論的に、「危ない！」という語は‘危険’を意味し、“Vorsicht!”は‘注意’に対応する。文法範疇としては「危ない」と“Vorsicht”は、それぞれ、形容詞と名詞に分類される。使用の際の重要な違いの一つは、話者が事態を(1)当該の状況の中から眺めるのか、(2)当該状況の外側から眺めるのか、に関わる

話者と状況との関係および視点にある。

「危ない！」の使用において、日本語話者は何らかの危険なことが起こるシーンに直面し、話者の目の前で起きていることを観察し、経験的に「危険」と記述している。すなわち、その場面を形容詞を用いて記述し、注意を喚起しはしているが、子どもに対して何ら具体的な指示を出していない。その意味で、話者はその場面の内側から事態を眺めているというスタンスであることが推測可能である。他方、ドイツ語の“Vorsicht!”の用法が示唆しているのは、日本語の場面に対応する場面において、その場面で起こったことを記述するのではなく、子どもに対して注意を払うよう要求しているということである。この意味において、“Vorsicht!”は、状況の外側にある視点から事態を客観的に眺めている発話ということになる。

視点に関するこのような差異は、なかなか理解しにくい。そこで、別の例を用いて、視点の違いをより明確に説明しておこう (Ikegami, 1991; 中村, 2004; 山梨, 2009)。たとえば同じ職場の同僚から電話があり、「そこに誰かいるか」と問われたとしよう。それに対する応答は次のようになることがある。

ここには誰もいないよ。

*Hier ist niemand da au er mir.* [Here is no one except me]

ドイツ語文(英語文)と比べると、日本語文は非論理的であるように見える。というのも、「ここに」ないし“hier”で指示されている空間には話者が存在しているもので、誰もいないことにはならないからである。もしこの日本語文を次のようなドイツ語文に対応するように書き換えれば、論理的にわかるようにはなる。

ここにはぼく以外、誰もいないよ。

この日本語文は、たしかに論理的ではあるが、日本語として少し不自然に感じられる。日本語の上記二文の違いは、「ぼく以外」(*au er mir*)という句の有無である。「ぼく以外」という句を伴った文が示唆するのは、その文の話者は事態を状況の外側から客観的に眺めているということである。なぜなら、その文は、観察する話者が自分を状況の中に捉えらえる形で表現しているか

らである。ところが、「ぼく以外」を伴わない文から読み取れるのは、話者自身が記述する話者の視野に入っていないということである。すなわち、この文は、状況の中に話者が含まれ、その内側の視点から状況を眺めていることがわかる。

### 3.1.2. 「聞こえません」と“Lauter bitte!”

機能的に等価な日常的慣用表現の別のペア、「聞こえません」と“Lauter bitte!”を同様に分析してみよう。

私たちが高校生だとしよう。もし授業中、クラスメートが教員に話していることが聞き取れない場合、私たちはその時何と言うだろうか。日本では、一般に、「聞こえません」というであろう。その際、その発言は教員に対して言っているのか、発言しているクラスメートに対して述べているのか、明示しないのが普通である。ところがドイツでは、クラスメートに対して、“Lauter bitte!”(もっと大きな声で)と言うだろう。ここで、上で見た「危ない!」と“Vorsicht!”のペアとの平行構造に気づく。

「聞こえません」は‘聞こえない’という意味で、問題状況が否定的に述べられる。ところが、その状況の解決への試みは、当該の表現では提示されていない。ドイツ語の対応表現“Lauter bitte!”はしかしながら、状況について述べることなく、問題状況の解消の試みが明確に発せられる。ここで視点について考えると、日本語では話者が状況をその中にいてそこから体験的に眺めている。他方、ドイツ語では、状況の外側から事態を観察し、対策を提案しているという構図である。なぜ対策を講じることが可能かといえ、問題状況をその外側の視点から眺めているので、状況を客観的に把握できる位置にいるからと考えることができる。ところが、日本語話者は、状況内部の視点からしか事態を眺めていないので、客観的にその問題状況を見る事ができていないのだ<sup>1)</sup>。

### 3.2. アンケート調査

ここで上記の観察結果をアンケート調査のデータでさらに検証してみよう。

回答者数：

－金沢市内の幼稚園T：

調査実施：2004年11月

有効回答数：37

－デュッセルドルフ市内の幼稚園S：

調査実施：2005年11月

有効回答数：33

回収されたアンケートの回答から多くの表現を得ることができた。それらの表現は、日独両言語の意味内容にしたがって、大きく5つのグループに分けることができる。

- 1) 「大丈夫」と指摘
- 2) 「痛み」に言及
- 3) 「痛み」と「大丈夫」に言及
- 4) おまじないをする
- 5) 「痛み」に言及し、おまじないをする

本稿では、このような意味タイプについて比較する。

### 3.2.1. 日本語

表1は日本人保護者の回答結果を示している：

表1：日本語の内容タイプ(%)

順位	内容タイプ	使用率
(1)	「大丈夫」タイプ	32.4%
(2)	「痛み」タイプ	29.4%
(3)	「痛み」と「大丈夫」タイプ	17.6%
(4)	おまじないタイプ	8.8%
(5)	その他	11.8%



「大丈夫」タイプと「痛み」タイプという2つの意味タイプの表現がそれぞれおよそ30%の保護者によって使用されている。「大丈夫」タイプに分類されるのは、たとえば、「そのぐらい大丈夫」などである。「痛み」タイプは、たとえば、「痛いね」がその例となる。両タイプを合わせると回答の60%以上に達する。

### 3. 2. 2. ドイツ語

表2はドイツ人保護者の回答である。

表2：ドイツ語の内容タイプ(%)

順位	内容タイプ	使用率
(1)	「大丈夫」タイプ	46.7%
(2)	「痛み」とおまじないタイプ	30.0%
(3)	「痛み」タイプ	10.0%
(4)	その他	13.3%

ドイツ人保護者が最も頻繁に使用するのは「大丈夫」タイプである。回答のほぼ半数がこのタイプに属する。たとえば、“*Na komm, ist doch nicht so schlimm*” (ちょっとこっちに来てごらん。たいしたことないよ)は、その例にあたる。日本語でもこのタイプが一番多く使用されているが、その割合は30%と低い。ドイツ人が2番目に頻繁に使用するのは、「痛み」と「おまじない」の複合タイプである(約30%)。たとえば、“*Hast Du Dir weh getan? Komm, ich puste!*” (痛かったか。おいで。痛いの痛いの飛んでけてあげてあげるから)。両タイプを合わせると全体の70%を占めることになる。ついでに言えば、ドイツ人の全回答のうち43.3%には“*komm*” (おいで)、“*zeig mal*” (見せてごらん)、“*schau mal*” (見てごらん)などの指示表現が含まれている。

### 3. 3. 傾向分析：「大丈夫」タイプか「痛み」タイプか

日本人は、「大丈夫」タイプと「痛み」タイプを使う傾向にある。前者の基本構造は、傷自体に焦点をあて、それを「大丈夫」と説明する。後者のタイプは共感という視点から言語化されている。たとえば、「痛いね」という最も使用

頻度の高い表現は、「痛い」と「ね」からなる。「痛い」は‘痛み’という意味をもつ形容詞である。「ね」は話法の終助詞であり、ここでは、たとえばあなたの痛みはよくわかっているという共感内容を聞き手に伝達する。

他方、ドイツ人は、「大丈夫」タイプを選択する傾向にある。このタイプの定型化パターンは、痛がっている子供の気分を変化させようと試みることにあろう。たとえば、“*Beruhige Dich, schau' mal hin. Ist doch alles in Ordnung*” (落ち着いて、見てごらん、もう何でもない)は、子供に対して指示を与える文であるが、日本語のこのタイプの対応表現は指示はなされずに、たとえば「そのぐらい大丈夫」というように単なる記述となる。ここで注意しておいていいのは、ドイツ人の保護者は子供を自分の所に来るように言うが、日本人の保護者は自分が子供ところに向かう傾向にあるという点である。さらに、ドイツ人が2番目に頻繁に使用するのは「おまじない」タイプであるが、これは子供たちの気分を変え、元気付けるものだということも指摘しておこう。

#### 4. おわりに

これまでの議論が示しているのは、ドイツ語と日本語の日常的慣用表現において次のように2つの視点が区別可能であるということである。

- (1) ドイツ語の慣用表現に典型的に見られる状況の外側に位置づけられている視点。そこでは、話し手と聞き手が対立し、距離をもってこのような表現を使用する。
- (2) 日本語の慣用表現に典型的に見られる状況の内側に位置づけられている視点。そこでは、話者は状況の中から状況を眺める。状況外からの視点はとらない。話し手は、距離なく、すなわち心理的な近さという感覚、すなわち共感をもって表現を用いる。

日本語における共感とドイツ語における対立という言語化傾向が他の慣用化した表現においても同様に認められるかどうかを検証するために、異なるタイプの機能的に等価な慣用表現を分析する必要がある。これは、今後の課

題となろう。

## 注

\* 本稿は、国際異文化間コミュニケーション学会 (International Association for Intercultural Communication Studies) 第15回大会 (2009年9月18-20日、熊本学園大学) における発表原稿が<sup>2</sup>基になっている。発表原稿 (英文) は機関誌に投稿中である。また、本研究は、研究課題「コミュニケーション行動制御慣用表現の日独対照研究」(科学研究費補助金 基盤研究(C) : 課題番号 : 20520378) による研究成果の一部である。

1) 知り合いの働いている職場に電話し、その知り合いと話したいと告げ、その本人が<sup>3</sup>応答する会話は参考になる。

A : ○○さんとお話ししたいのですが<sup>3</sup> / I would like to speak to Mr.○○

B : 私です。 / This is he.

「○○さん」は応答しているBなので、日本語なら「私です」と答えてしまう。ところが英語だと“*This is he*”と3人称表現になるようだ (cf. 廣岡, 2009 : 210-211)。この対立も視点の位置の違いを示唆している。このような視点の違いについて、金谷 (2004) は日本語と英語を対照し、「虫の視点」と「神の視点」の違いであると分析している。

## 文献

- Hermanns, F. (1993). Mit freundlichen Grüßen. Bemerkungen zum Geltungswandel einer kommunikativen Tugend. In W. P. Klein, & I. Paul (Eds.), *Sprachliche Aufmerksamkeit. Glossen und Marginalien zur Sprache der Gegenwart* (81-85). Heidelberg : Universitätsverlag C. Winter.
- Hermanns, F. (1995). Kognition, Emotion, Intention. Dimensionen lexikalischer Semantik. In G. Harras (Ed.), *Die Ordnung der Wörter. Kognitive und lexikalische Strukturen* (138-178). Berlin & New York : Walter de Gruyter.
- 廣岡慶彦 (2009). 『英語科学論文の書き方と国際会議でのプレゼン』。東京 : 研究社。
- Ide, S., Hill, B., Carnes, Y. M., Ogino, T., & Kawasaki, A. (1992). The Concept of politeness : An empirical study of American English and Japanese. In R. J. Watts, S. Ide, & K. Ehlich (Eds.), *Politeness in language : Studies in its history, theory and practice* (281-297). Berlin & New York : Mouton de Gruyter.
- Ikegami, Y. (1991). DO-language and BECOME-language : Two contrasting types of linguistic representation. In Y. Ikegami (Ed.), *The empire of signs : Semiotic essays on*

- Japanese culture* (pp. 285-326). Amsterdam & Philadelphia : John Benjamin.
- 金谷武洋 (2004). 『英語にも主語はなかった』. 東京 : 講談社.
- Kuhlmann, J. (2005). Sind Deutsche weniger kooperativ als Japaner? *Lebende Sprachen*, 2, 68-76.
- 久野 暉 (1973). 『談話の文法』. 東京 : 大修館書店.
- 牧野成一 (1978). 『ことばと空間』. 東京 : 東海大学出版会.
- Marui, I., Nishijima, Y., Noro, K., Yamashita, H., & Reinelt, R. (1996). Concepts of communicative virtues (CCV) in Japanese and Chinese. In M. Hellinger, & U. Ammon (Eds.), *Contrastive sociolinguistics* (385-406). Berlin etc. : Mouton de Gruyter.
- 中村芳久 (2004). 主観性の言語学. In 中村芳久編, 『認知文法論II』 (pp. 3-51). 東京 : 大修館書店.
- 南相稔, 西嶋義憲, & 斉木麻利子 (2006). ポライトネス・グラマー —コミュニケーション行動評価概念の日韓比較—. 『金沢大学留学生センター紀要』, 9, 1-19.
- Nishijima, Y. (1995). Über den Bedeutungswandel von "teinei" -Zum internationalen Vergleich der Konzepte von kommunikativen Tugenden-. In 論文集刊行委員会編, 『好村富士彦教授退官記念論文集』 (207-220). Matsuyama.
- Nishijima, Y. (1996). Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens (BKKV) und soziale und kulturelle Verhältnisse. -Ein lexikalsicherer Ansatz anhand der Beschreibung in Wörterbüchern-. 『金沢大学教養部論集』, 33(2), 155-178.
- Nishijima, Y. (2000). „Freundlich“ und „höflich“ : Interkulturelle Aspekte des kommunikativen Verhaltens. 『言語文化論叢』 (金沢大学外国語教育研究センター), 4, 185-207.
- Nishijima, Y. (2006). Perspektive in Routineformeln im Deutschen und Japanischen. 『言語文化論叢』 (金沢大学外国語教育研究センター), 10, 157-182.
- Nishijima, Y. (2007). For a Contrastive Study of Routine Formulas for Controlling Communicative Behaviors in German and Japanese : A Pilot Investigation. In S. Kusune, Y. Nishijima, & H. Adachi (Eds.), *Socio-cultural transformation in the 21<sup>st</sup> century? Risks and challenges of social changes* (pp. 347-357). 金沢 : 金沢電子出版.
- 西嶋義憲 & 陶琳 (2010). コミュニケーション行動評価概念の日中比較. 『語彙研究』, 6, 66-78.
- Reinelt, R. (1995). Wie die Höflichkeit ihr Gesicht verlor. 『愛媛大学教養部紀要』, 28, 131-160.
- 山梨正明 (2009). 『認知構文論』. 東京 : 大修館書店.
- Yamashita, H. (1995). Zur bewertenden Konzepte kommunikativen Verhaltens. -am Beispiel des japanischen Anredeverhaltens-. 『言語文化研究』 (大阪大学言語文化研究科), 22, 273-294.